住用中の学習の様子が新聞で紹介されました！

奄美新聞 7 月 27 日（火）

住用の自然を守るために

住用中、世界自然遺産について独自の学習

奄美市の住用中学校（原憲正校長・生徒10人）では、奄美の世界自然遺産登録の動きをきっかけに、2年前から総合学習の中で地元を知る授業を取り入れ始めた。自分たちの暮らしている地元をもっと知り、その価値、素晴らしさをもっと学ぼうと活動している。校区内の美化活動の一環でごみ拾いをしたり、三味線や島口を使った劇にもチャレンジしている。

また2年生（7人）は愛着を持つとともに自分たちに何ができるのかを考え発表する」。そして、住用の自然を守るために、自分たちに何ができることなのかをあえてとしている。

12日、前職は環境省の職員だったマングローブカヌーガイドの高橋周作さん（26）を招き、6月の座学に続いて、フィールドワークを行った。この日は同校から奄美アイランド手前のマングローブパークの裏側まで歩き、アマミノクロウサギが食べる植物・食べない植物、外来植物・在来植物などを観察した。

高橋さんは、「奄美はマテバシイやスダジイなどの山林が80%を占め、アマミノクロウサギは草食で、それらを食べて生活している」と話し、道端のホウロクイチゴの葉や、外来種のランタナ・アメリカハマグルマなどを生徒たちに教え、聞こえているオオシマゼミやヒヨドリの鳴き声にも耳を傾けた。道すがらにバーバートカゲやイシカワガエルは見つけた人の名前がついていることも話し、生徒がリュウキュウアオヘビを見つけると「本土ではアオダイショウとも言われる」と答えた。

マングローブパークの干潟では、メヒルギの白い花が咲いているのを観察。33種類のカニが生息していることやハイビスカスの原種とされるハマボウを指さし、黄色い花の花言葉は「楽しい思い出だよ」と伝え、住用の道端やマングローブパークの動植物を数多く紹介した。

西仲間に住む森岡大悟さんは「知らない植物をたくさん知ることができてよかった」と話し、所崎佳乃さんは「結構知らない動植物がいっぱいで、おもしろかった。道端にごみが多く落ちていて気になった。世界自然遺産登録になるのに、恥ずかしいから、みんなでごみ拾いの協力をしたいと思った」と語った。

「価値ある自然が身近にありすぎて、実感ができていないのではと感じていた」と話すのは2年の担任の栗林知美教諭。「繰り返しと積み重ねで身近にある自然の素晴らしさや価値を知ってほしい」と、授業を通して地元の魅力に気が付くことを楽しみにしている。

高橋さんのヒカゲヘゴの紹介に熱心に聞き入る生徒たち

マングローブ林の中に高橋さんの用意してくれた奄美の動植物がいないかを探す